ひと

東日本大震災の発生2日後。まだ被害の全容がわからない中、宮城県庁の対策会議で「遺体は万人単位に及ぶ」と発言し、新聞の1面の見出しになった。

次々と遺体が見つかるのに安置場所がない。検視する人員がいない。遺体を洗う水もゴム手袋も、ひつぎも足りない。動きの鈍い政府に向け、現場指揮官が発した「SOS」だった。同県の犠牲者数は、最終的に約1万2千人に上った。

災害支援NPOを立ち上げた元宮城県警本部長

竹内（たけうち） 直人（なおと） さん(66)

県警本部長として、できる限りのことはした。それでも悔いは残る。

行方不明者情報と遺体を突き合わせ、身元特定につなげようと、独自に相談ダイヤルを設けた。火葬場が圧倒的に足りず、警視庁にいた同期に、東京都での支援をかけ合った。ときに行政機関の領分を越え、例外を重ねた。教訓はその後の備えに十分生かされているだろうか。

2015年に退官後は、「警察謝恩伝道士」を名乗り、震災の経験を各地の後輩たちに伝えてきた。

今年9月、NPO「災害時警友活動支援ネットワーク」を設立。12年前の反省点を探り、次に大災害が起きた時の警察支援や助言役をめざす。キャリア警察官僚OBや元県警幹部らが名を連ねる。

大災害の被害は、ともすれば犠牲者の「数」で表されがちだ。だが、現場の警察官が向き合う一人一人のご遺体に名前があり、帰りを待つ家族がいる。そのことを決して忘れない。

文・石橋英昭　写真・吉田耕一郎